

わ さい 和裁

しっかい
「悉皆」の精神で着物をプロデュース



まきの まもる
牧野 守

松坂屋の前身であるいとう呉服店の裁縫部で働いていた先々代の祖父が、昭和21年に牧野和裁を創業。和服の仕立てを行うだけでなく、牧野和裁学院として後進の育成も行っている。



和裁とは

手縫いを中心とした伝統の技法で和服を縫い上げることをいいます。

着物文化を支える「悉皆」

日本の着物文化を支えてきた仕事のひとつに、「悉皆」があります。着物は、親から子、子から孫へ世代を超えて代々受け継がれることを想定して、作り直すことが可能なように作られています。持ち主の想いのこもった着物が大切に長く着続けられるように、寸法直しや紋もんの入れ替えなどの着物に関するメンテナンスを文字通り「ことごとく」一手に引き受けるのが「悉皆」しっかいです。

▼ 修復前



▼ 修復後



「和裁」と「洋裁」の違い

和裁と洋裁の大きな違いは、布の切り方にあります。

洋裁の場合は、型紙のサイズに合わせて布を裁断しますが、和裁は縫いしろを含めた布をすべて直線に裁断します。縫い合わせる際には、縫いしろの部分は見えないところに畳み込んでおくので、のちに縫い合わせた糸を外すと、縫いしろが出てきます。その縫いしろを使って、服のサイズや形を直すことができるのが、和服の大きな特徴です。



縫い合わせた糸を外すと
縫いしろが出てくる

和服が仕立てられるまで（一例）

- ① 反物の仕上がりけんたんと長さ、幅などを調べるため、「検反」と「検尺けんじゃく」をする。
- ② 生地を安定させるために、アイロンをあてて「地直しぢなお」をする。縮みやすい生地は、あらかじめしっかりと縮めてから「裁断」する。
- ③ 縫い合わせる布同士の長さが正確に合うように、「標つけしるし」する。
- ④ 最後に、一針一針、糸を引く力加減や縫い目の細かさを少しずつ変えながら、着物を「縫い」上げる。



職人さんに聞きました！

Q 和裁士は一人前になるまでにどれくらいかかるのですか？

A 最初は、^{うんしん}運針などの基礎訓練から始めて、^{ながじゅばん}長襦袢(和服用の下着のひとつ)や^{こもん}小紋(細かい模様が全体的に入った和服の種類のひとつ)が縫えるまでに2～3年くらいかかります。国家検定1級の「和裁技能士」の資格を取得するまでに、およそ8～10年。それがプロのスタート地点と考えるならば、一人前といえるのは、それから5年くらいでしょうか。



Q 牧野さんはどのような着物に価値があると思いますか？

A 価値があるというと、豪華で値段が高そうな着物を想像する人が多いと思います。もちろん、そういった着物にも価値はあります。ですが、たとえ高価でなかったとしても、何年も着られているうちに擦り切れてしまったお気に入りの着物が、仕立て直しをしたことでもう10年着られるようになったとすれば、それは素晴らしいことです。そのように、何度も仕立て直しをして、大切にされてきた着物が、その人にとって一番価値があるといえるのかもしれないし、それが着物の特徴でもあると思っています。

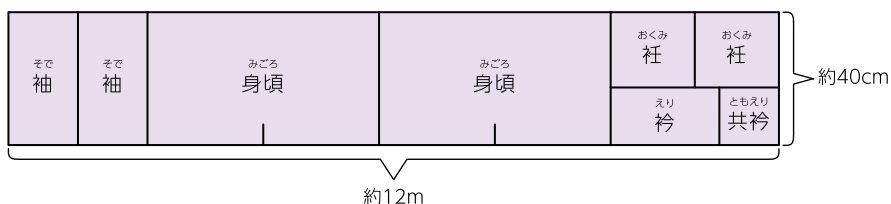
子の代、孫の代と着物が受け継がれることを想定して和服を縫っているという牧野さん。大切なものを長く着ることができる「無駄を生まない」和服の特性を、多くの人に知ってもらいたいと語っています。



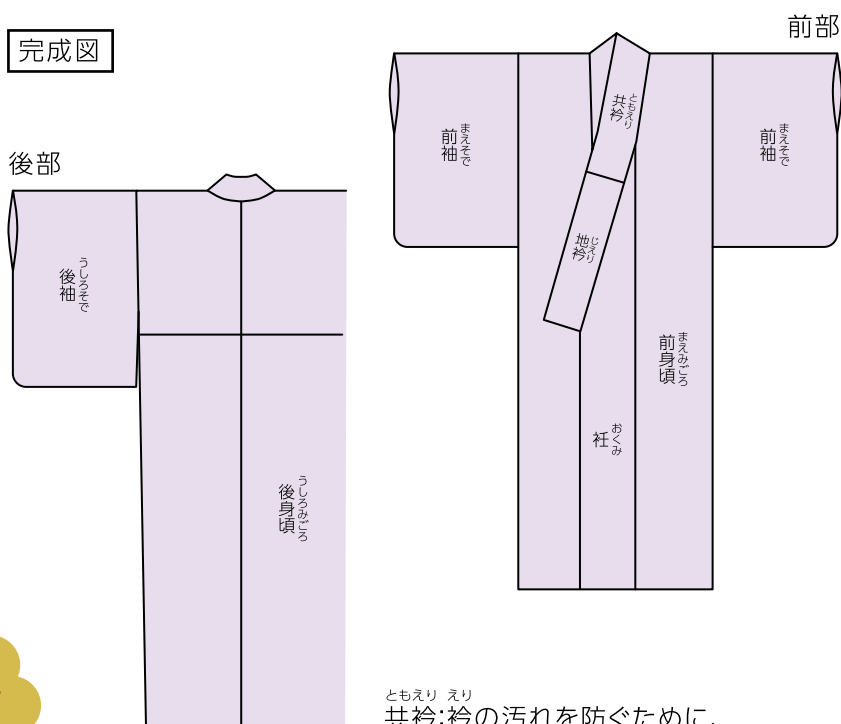
着物の部位と布の裁ち方

布1反(縦約40cm・横約12m)から、大人1着分の着物が作られます。
例えば長着の場合、以下のように布を裁ちます。

裁ち方



完成図



ともえり えり
共衿: 衿の汚れを防ぐために、えり
衿の上からさらに付けた衿のこと
えり
おくみ まえみ ごろ
衿: 前身頃に縫いつける細長い布のこと